

沖縄近代史・琉球王国から沖縄県へ

「同化」をめぐる

近現代の沖縄

(第4講 2021年12月25日)

担当：前田 勇樹

(琉球大学附属図書館)

「ヤマトンチュー（大和人）になりたくて、なりきれない心だろう。」（1985年）

西銘順治（元沖縄県知事）

1970年初の沖縄国会議員記者会見の写真  
（沖縄県公文書館所蔵）



# 教育

- 置県当初から「教育」は重点施策  
→ 一大課題 … 「言葉が通じない」
- 最初に師範学校（会話伝習所）を設置（1880年）  
→ 順次、各地に小学校設置
- 明治前半は就学率も伸び悩む  
→ 「大和屋（やまとやー）」



# 1890年代 ～解放と同化の時代～

- 日清戦争（1894～1895年）の結果（第2回）
- 就学率の上昇（1901年には70%）  
断髪／和装の普及／方言札／ハジチの禁止（1899年）
- メディアの誕生 … 『琉球新報』創刊（1893年）
- **土地整理事業**（1899～1903年）  
→ 沖縄版「地租改正」 … 土地からの“解放”
- **徴兵令の施行**（1898年～）  
→ 日本語を話す必然性が生じる出来事／徴兵忌避

# 人類館事件

- 事件のあらまし

第5回内国勸業博覧会（1903年3月～7月）の「学術人類館」にて、生身の人間が「北海道アイヌ、台湾の生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇の七種の土人」として「陳列」された。甘言に騙された辻遊郭の女性二人が「琉球の貴婦人」として展示。

→ 『琉球新報』が連日の抗議

\* 「アイヌや台湾生蕃」と同列に扱われたことに対する反発

\* 「劣等の婦人を以て貴婦人を代表せしめ」

# 日露戦争

- 薩摩侵攻以来 “一般の沖縄人” が300年ぶりに経験した戦争
- 「島ぐるみ」の戦争経験  
→ 2,000人が出征（その内、200人が戦死）
- 戦後、各地で「招魂祭」／忠魂碑の建立  
→ 戦没者の慰霊・顕彰  
→ 余興を伴う地域的な祝祭



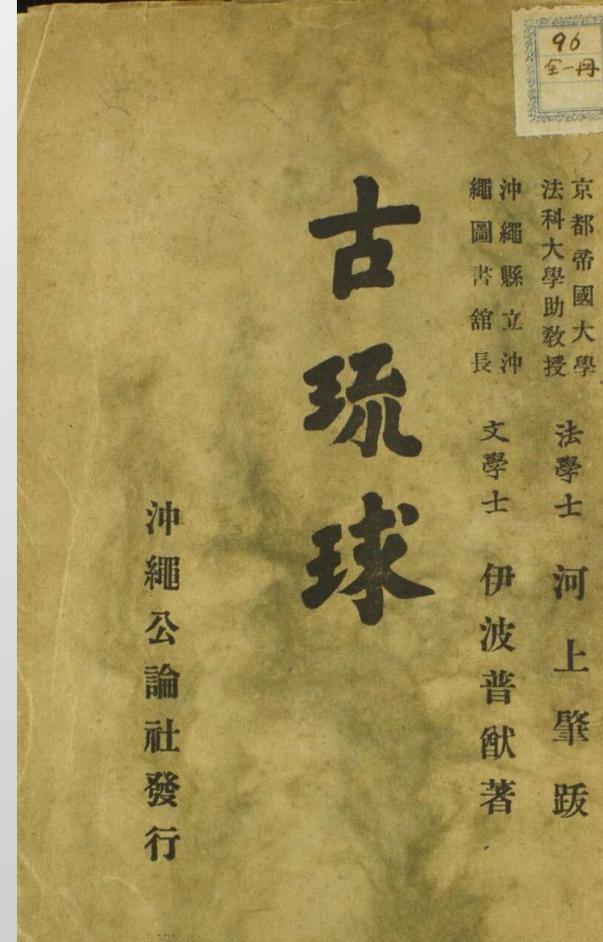
首里城歓会門脇の「忠魂碑」 (1916年)



守礼門 ↑

# 「古日本の鏡としての琉球」

- 日露戦争後 … 地方改良運動  
→全国的に郷土の歴史・文化の見直し
- 「日琉同祖論」 … 伊波普猷
- 柳田国男による沖縄の「再発見」(海南小記の旅)  
→「古日本の鏡としての琉球」
- ちなみに、この時期の「琉球処分」の評価は…  
「一種の奴隷解放」(伊波普猷)



伊波普猷『古琉球』初版(1911年)  
沖縄県立図書館所蔵

# 戦後に立ち現れる「沖縄近代」

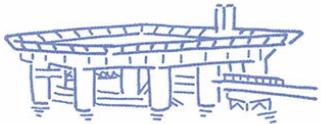
- 「再日本人化」の時代（1950年代以降）
- 「琉球処分」の歴史認識  
 奴隷解放(戦前)／民族統一(60年代)  
 ⇔ 80年代以降… 「併合」／「自己決定権」喪失の契機
- 知念正真「戯曲 人類館」（1976年）  
 → 沖縄をめぐる「同化」と差別の問題が問い直される。



つながる

# 沖縄近現代史

— 沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム



前田勇樹  
古波藏契 編  
秋山道宏



ボーダーインク

◇A5判 232頁

◇定価2420円（本体2200円＋税10%）

◇前田勇樹・古波藏契・秋山道宏 編

◇出版：ボーダーインク

この本は「教科書」でも、歴史のトリビアを寄せ集めた「歴史ネタ本」でも、専門用語と古文書だらけの「専門書」でもない。世界史や日本史とのつながりを意識し、現代の沖縄社会の課題に向き合う上で必須と思うテーマを選び、最新の研究成果を踏まえ、史料に基づき、時代の流れに沿って配置した沖縄近現代史の「入門書」である。

執筆者は本章とコラム併せて、総勢25名。多彩なバックグラウンドを持つ研究者たちが、知恵や知識を出し合って、世界史と日本史のつながりを意識し、沖縄に興味をもつ幅広い読者へむけてまとめた。